

大正期の17歳女子は何を読んだか  
—吉田彌平ら編『女子國語讀本』の基礎研究—

(代表者) 附属高等学校天王寺校舎 教諭 松岡礼子  
(分担者・協力者) 高2「総合科」松岡講座受講生

井上佳穂 大西理桜 島崎未海 田中涼夏 東山真里亜  
増谷幸香 村上愛結 山本有紗 吉澤舞 吉田眞生  
大倉みなみ 大塚一輝 下釜彩佳 増井天音 山田史佳  
秋山紀子 傳田美雨 橋本香織 増田愛梨 吉田光希

## 1. はじめに

大正期の国語教材を当時の17歳ほどのように読んでいたのでしょうか。

平成の今を生きる17歳の私達が、大正期に17歳を経験した女性に会って話を聞くことは残念ながら物理的に難しいが、当時の国語教科書の中にその答えを求めることは可能である。

私たちは大正ロマン、『ハイカラさんが通る』に代表される女学生文化、モダンガールなどイメージとしての大正を知っており、好奇心は掻き立てられるが具体としての大正に触れる機会は限られている。そこで、(現代の中学1年生から高校2年生にあたる)高等女学校の生徒に長く広く使われていた吉田彌平ら編『女子國語讀本』を研究対象に取り上げ、大正期の女学生が何を読み何を感じたか、追体験したいと考えた。

## 2. 研究の目的と方法

吉田彌平ら編『女子國語讀本』は明治35(1902)年3月に訂正再版が検定合格して以来、大正14(1925)年まで19版の六訂まで版を重ね、四半世紀以上に亘って使用された、代表的な国語讀本である。6種の改訂版—M35初版『女子國語讀本』(以下、『女子』と表記)、M39五版『再訂女子國語讀本』(以下、『再訂』と表記)、T1九版『三訂女子國語讀本』、T7十三版『四訂女子國語讀本』、T10十五版『五訂女子國語讀本』、T13十九版『六訂女子國語讀本』(以下、『六訂』と表記)—のうち、本研究では『六訂』を主たる研究対象として用いるが、大正教科書の文体をめぐる問題に触れる際には比較対象として明治期の使用教科書の代表格、『再訂』を取り上げる。

井上(1981)は『女子』を「文体は文語文中心で、口語文は一割程度で消極的な採用である。しかし普通散文において時文を主体としたこと、徳育において国体意識の強要、忠孝論のおしつけなどの文章をさけている点は、進歩的な視点である」と解題した。この解題の後半部分について、眞有(2005)は意義を唱え、「『讀本』は当時の政策をそのまま反映し、忠実にそれを刷り込む道具として位置づけることができる」ものであり、「『おしつけなどの文章』であるかどうかは、読み手の判断に委ねるしかあるまい」と結んでいる。眞有は田坂(1969)の「讀本」七分類—①徳育関係教材②文学関係教材③歴史関係教材④随想紀行関係教材⑤啓蒙教材⑥逸話・伝記関係教材⑦戦争関係教材—にならって『再訂』の内容分析を試みるが、最終的にはこのジャンル分けにも疑義を呈す。高山(2017)はこれら先行研究を踏まえて、吉田彌平ら編『女子國語讀本』6種すべての言語教材としての教材性を検討している。

これら先行研究が残した課題をふまえ、明らかにしたいと考えたのは次の4点である。

- ① 『女子』で一割程度だった口語文の採用は、大正期の『六訂』にいたってどう変化したか。
- ② 平成を現代として生きる私たちの感覚で『六訂』をジャンル分けすると、どうなるか。
- ③ 未曾有の大惨事である大正12年の関東大震災はどのように教材化されたか。
- ④ ほぼ1世紀前の日本語教材は、平成の高校生に「わかる」のか。

これらを明らかにするための方法を、それぞれ次のように考えた。

- ① 教材の口語体と文語体の比率を明らかにし、教科書文体を考察する。
- ② 特徴的だと思われる傾向をみきわめて独自のジャンル分けをおこなう。
- ③ 『ハイカラさんが通る』における描出方法を比較対象に、震災の教材化の特徴を考察する。
- ④ 『六訂』の最も印象に残った作品を17歳の視点から選んで解題する。

以下、①から④の考察結果をまとめていく。

資料1 『六訂』教材一覧

一	國花	芳賀矢一	卷一
二	春	大和田建樹	卷二
三	姉に	金剛山	皇后宮の御淑徳
四	燕	尾上八郎	花火
五	狗ころ	長谷川二葉	金剛山
六	亭大原女	専心	波の音
七	深山の島	大阪城	夕暮
八	皇太子妃殿下	高濱虚子	專心
九	やさしの望	武島羽衣	大阪城
十	目標	瓜生岩子	かなりや
十一	奇蹟	林久男	動物の天國
十二	人の運	大町桂月	上原敬商
十三	飛行	岩本周平	西條八十
十四	雨	北原白秋	滋川玄耳
十五	お祭	泉鏡花	西條八十
十六	住めば都	頼智究明	上原敬商
十七	家庭日記	幼時の美感	金子元臣
十八	暑中見舞	自由の神	大和田健樹
十九	働く料簡	泉岳寺	徳富健次郎
二十	震災記	北地の冬	三浦修山
二十一	水の御馳走	歳暮感懐	大町桂月
二十二	佐藤つる	一年ノ計	五十嵐力
二十三	蜻蛉	田舎の祖母に	中野秋泉
二十四	明治天皇の御遺物	名入團平	大町桂月
二十五	乃木大将夫人	氷の諏訪湖	泉岳寺
二十六	秋分	氷の諏訪湖	自由の神
二十七	まことの愛	ペンギン鳥	泉岳寺
二十八	海上日記	安宅	泉岳寺
二十九	箱根路	雛祭の記	泉岳寺
三十	山村	山彦	泉岳寺
三十一		豪商と碩儒	泉岳寺
三十二		樂しき我が家	泉岳寺
三十三		曾我兄弟	泉岳寺
三四			泉岳寺
一	千里の春	大和田建樹	卷三
二	皇太子殿下の御幼時	石井國次	千里の春
三	渡舟坪内雄蔵	藤岡作太郎	皇太子殿下の御幼時
四	田舎より	高濱虚子	渡舟坪内雄蔵
五	朝の庭	室鳩巢	田舎より
六	老僧の接	杉村廣太郎	朝の庭
七	人の一生	相馬御風	老僧の接
八	朝の岬	難破船	人の一生
九	難破船	夕雲雀	朝の岬
十	夕雲雀	紅蘭女史	難破船
十一	紅蘭女史	杜鵑	夕雲雀
十二	杜鵑	桶峽中野秋香	紅蘭女史
十三	桶峽中野秋香	若林欽	杜鵑
十四	珊瑚礁	武島羽衣	桶峽中野秋香
十五	南洋	徳富健次郎	珊瑚礁
十六	漁村	田山花袋	南洋
十七	わが故郷	幸田露伴	漁村
十八	夏	三宅やす子	わが故郷
十九	雑草	近松秋江	夏
二十	故郷の山	高安月郊	雑草
二十一	夏の京	萩原井泉水	故郷の山
二十二	水の都	太田蜀山人	夏の京
二十三	富士登山	藤岡作太郎	水の都
二十四	蜀山人の盆灯籠	遅塚麗水	富士登山
二十五	禮者	吉田絃二郎	蜀山人の盆灯籠
二十六	大石良雄と忠僕八介	砂丘	禮者
二十七	飛騨の山中より	春が来た	大石良雄と忠僕八介
二十八	蛭	初雛を贈る	飛騨の山中より
二十九	漢字の音	女子の同情	蛭
三十	国民性	根分の後の子草	漢字の音
三十一	虫の音		国民性
三十二	松平信綱		虫の音
三十三	美濃の隠家		松平信綱
三十四	银杏樹		美濃の隠家
一	バツケンガム宮殿に於ける東宮殿下	溝口白羊	卷四
二	千代女	朝顔	バツケンガム宮殿に於ける東宮殿下
三	筑紫の秋	吉田絃二郎	千代女
四	故郷	正岡子規	筑紫の秋
五	紅葉の便り	佐々木信綱	故郷
六	湖畔の秋	大和田建樹	紅葉の便り
七	嫩草山	徳富健次郎	湖畔の秋
八	鶴が城	大瀬伸	嫩草山
九	皇室に関する敬語	柴田鳩翁	鶴が城
十	紐育	徳川光国	皇室に関する敬語
十一	金平糖の壺	徳富健次郎	紐育
十二	苦菜	武島羽衣	金平糖の壺
十三	冬	関根正直	苦菜
十四	初日影	堀秀成	冬
十五	縁起	杉村廣太郎	初日影
十六	豊臣太閤の文事	三木羅風	縁起
十七	茶僧利休	石川依平	豊臣太閤の文事
十八	牧場の暁	福佳正兄	茶僧利休
十九	牧神の笛	高山樗牛	牧場の暁
二十	四季の月	福沢諭吉	牧神の笛
二十一	二宮尊徳の訓言		四季の月
二十二	わが袖の記		二宮尊徳の訓言
二十三	人間の三等		わが袖の記
二十四	旅順口閉塞		人間の三等
二十五	極地の探検		旅順口閉塞
二十六	夜半の時雨		極地の探検
二十七	砂丘		夜半の時雨
二十八	春が来た		砂丘
二十九	初雛を贈る		春が来た
三十	女子の同情		初雛を贈る
三十一	根分の後の子草		女子の同情
一	明治神宮	徳富健次郎	卷五
二	十二徳	徳富健次郎	明治神宮
三	春宵	夏目漱石	十二徳
四	峠の茶屋	島崎藤村	春宵
五	戦時の巴里	河上肇	峠の茶屋
六	鍵の室障子の家	厨川白村	戦時の巴里
七	旅館		鍵の室障子の家
八	ことばづかひ		旅館
九	徳川光友の室		ことばづかひ
十	時間		徳川光友の室
十一	修善寺より	尾崎紅葉	時間
十二	十國峠の眺望	高山樗牛	修善寺より
十三	筆の歌	武島羽衣	十國峠の眺望
十四	マゾチン夫人	下田歌子	筆の歌
十五	樂地	幸田露伴	マゾチン夫人
十六	自省	阿部次郎	樂地
十七	おまんの方		自省
十八	黒井繁乃		おまんの方
十九	江津川		黒井繁乃
二十	蒲の花がたみ		江津川
二十一	天下第一の義舉		蒲の花がたみ
二十二	川どめ		天下第一の義舉
二十三	華嚴の瀑壺		川どめ
二十四	夏		華嚴の瀑壺
二十五	香港		夏
二十六	金字塔		香港
二十七	九月十三日の夜		金字塔
二十八	禁庭の野分		九月十三日の夜
二十九	空行く雁		禁庭の野分
三十	月光の曲		空行く雁

一	田園雜興	大町桂月	九十の春光	自然の愛好	年中行事	國家
二	果物の味	正岡子規	高瀬舟	太陽の言葉	雲雀	月雪花
三	忘れがたみ	外山正一	さざれ水	明治の偉人	遠山櫻	芳宜園大人の霊を祭る
四	動物園	芥川龍之介	山路の物語	明治天皇御製	喜納治五郎	秋の気魄
五	日光の山路	熊王の発心	熊王の発心	賀頌	興謝野晶子	ぢいは山
六	茶道	姉崎正治	湯河原	村祭	萩原井泉水	重盛諫言
七	海之光	金子薫園	柏餅	石清水	兼好法師	萬法一如
八	秋の月	上杉治憲	櫻井の宿	栗栖野	兼好法師	熊野落
九	桃の嫩葉	細井平洲	母の教訓	笑と涙	野口米次郎	生命の直感
十	留守宅へ	國木田独歩	をさな子	秋夜	幸田露伴	嫁菜
十一	辯論術	武蔵野	崎人一茶	狐塚	德富健次郎	音楽
十二	嶽雪	富士の高嶺	夜討曾我	野分	中島廣足	敦盛の最期
十三	英独佛の國民性	和垣謙三	沖つ遠山	国許なる姉に	下田歌子	扇の的
十四	ヒマラヤ紀行	島崎藤村	兼好法師	病院	大町桂月	七夕の空を仰ぎて新城新藏
十五	遠望	吉江孤雁	山路愛山	叔母に	岩倉具視	花のやど
十六	霧の倫敦	夏目漱石	尾崎紅葉	安井夫人	森林太郎	人の新盆に
十七	蓮月尼	監井雨江	愛兒の記念	ワシントンの母	有王島下り	百蟲譜
十八	吾妻路	阿佛尼	詔書	源平盛衰記	忠度都落	義時と泰時
十九	浮島原	義経記	月の佳	武將の連歌	源平盛衰記	東路の旅
二十	本多重次	新井白石	長柄堤の訣別	皇国の姿	芳賀矢一	先客萬来
二一	税所敦子君を誅す	高崎正風	坪内逍遙	阿波の鳴門	近松半二	秋の力
二二	綾のみけし	兼好法師	德富健次郎	カルナバル祭	菊池幽芳	山の温泉から
二三	鼎かつき	鴨長明	長柄堤の訣別	春待草	相馬御風	心と言葉
二四	安元の花	高山林次郎	德富健次郎	阿波の鳴門	相馬御風	芭蕉
二五	日蓮上人	安藤国秀	坪内逍遙	カルナバル祭	相馬御風	死と永生
二六	信	松本亦太郎	坪内逍遙	春待草	相馬御風	芭蕉
二七	蘭人の趣味	長塚節	坪内逍遙	春待草	相馬御風	芭蕉
二八	蛙の聲	樋口一葉	坪内逍遙	春待草	相馬御風	芭蕉
二九	都に着きて	大西祝	坪内逍遙	春待草	相馬御風	芭蕉
三〇	道	大西祝	坪内逍遙	春待草	相馬御風	芭蕉
三一						
三二						
三三						
三四						

### 3. 『六訂』の構成分析

資料1に『六訂』巻一～十の全教材リストを示した。これをもとに以下、構成分析をおこなう。

#### 3. 1 季節性に配慮した教材配列

各巻に共通して特徴的なのは、季節感をともなう教材の多さである。季節と教材の配列の関連性を明らかにするために、資料2に季節感をともなう教材一覧をまとめた。○内の数字は第何課にあたるかを示し、記述や自然の描写から季節がわかるものだけ書き出した。

資料2：『六訂』の教材配列と季節の関係

巻一	①春 ②春 ⑦春夏 ⑰夏 ⑳秋 ㉑夏 ㉓夏 ㉔秋 ㉕秋 ㉖秋
巻二	①秋冬 ②秋冬 ④秋冬 ⑤秋 ⑪夏 ⑫秋 ⑬秋 ⑱冬 ⑲冬 ⑳冬 ㉑冬 ㉒春 ㉓冬 ㉔冬春 ㉕春 ㉖春巻三
	①春 ④春 ⑤春 ⑧春 ⑨夏 ⑫春 ⑮夏 ⑱夏 ㉑夏 ㉒夏 ㉔夏 ㉖冬 ㉘夏 ㉙秋㉚秋
巻四	④秋 ⑥秋 ⑦秋 ⑧秋 ⑭冬 ⑮冬 ⑱冬 ㉑冬春 ㉕春 ㉘春 ㉙春 ㉚春 ㉛春巻
五	④冬 ㉒秋 ㉔夏 ㉗秋 ㉙秋
巻六	③冬 ⑤秋 ⑧秋 ⑩秋 ⑬冬 ⑯冬 ⑱冬 ㉑秋 ㉓春 ㉔春 ㉕春
巻七	①春 ④夏 ⑥春 ⑩夏 ⑱夏 ㉑秋 ㉓秋
巻八	⑤冬 ⑧秋 ⑨冬 ⑩秋 ⑯冬 ⑰冬 ㉘春
巻九	②春 ⑥夏 ⑫冬 ⑬冬 ⑭夏 ⑱秋 ㉑秋 ㉓秋
巻十	②冬 ④秋 ⑧春 ⑨冬 ⑩冬 ㉑冬

『女子國語讀本』は5年分で10巻あり、1年間に2巻のペースで使用される。2巻セットで見るとおよそ春→夏→秋→冬(→春)の順になっており、掲載順と季節性の関係を指摘できる。

[文責：秋山 橋本 山田]

#### 3. 2 主要ジャンル

眞有(2005)の考察からもうかがえるように、明治期・大正期の教科書のジャンル分類は、作品の何を基準にしておこなうかが問われる作業で、読み手の設けた基準次第というところがある。それをふまえた上で、現在の読み手であるわたしたち17歳の感覚を大事にして、わたしたちなりのジャンル分類を試み、主要ジャンルとして以下の九つを見出すにいたった。

資料3：『六訂』の主要ジャンル

各巻の特徴を以下に列挙する。巻一＝偉人伝(5課)が一番多い。その次に随想、小説(各4課)が多い。巻二＝随想、小説(各5課)が一番多い。その次に偉人伝、説明文(各4課)が多い。笑い話、戯曲など新たなジャンルが追加されている。巻三＝随想(11課)が全巻の中で一番多い。二番目に多いジャンル、偉人伝(5課)との差が大きい。物語(3課)については主要9ジャンルのどこにおさめるべきか検討中。巻四＝随想(7課)も多いが、紀行文や偉人伝、詩(各4課)なども目立つ。巻五＝随想(9課)が多い。偉人伝、小説、説明文(各3課)で、巻三に似たバランスである。巻六＝随想(10課)の数が巻三の次に多く、偉人伝、詩(3課)が続く。出てきたジャンルの数は一番多い。七巻＝随想(4課)の数が急に減り、小説(5課)が増える。紀行文(3課)。全体的にジャンルはバラバラだ。巻八＝ジャンルがバラバラなものもあり、随想(8課)が圧倒的に多い。紀行文、書簡・手紙文(各2課)。浄瑠璃が出てきた。巻九＝前巻に比べて随想(4課)の数が減る。評論文(3課)が全巻の中でも多いが、これも主要9ジャンルのどこにおさめるべきか検討中。巻十＝随想、短歌、古典(各3作)。どのジャンルも満遍なく載せられている。

全体として、随想や物語、偉人伝系が多く、また巻数によって多い少ないはあっても、十巻全て

に載せられている。後半になると和歌や軍記物語が増え、口語文でなく文語文が増えてくる。

偉人伝系の内容の考察は後の項に譲るが、全巻を通して約 20 課もあるのが目立つ。入学年度のテキスト巻一と二年生の前期テキストにあたる巻三にはそれぞれ 5 課あり、上級生となる 4 年生のテキストにあたる巻七・巻八にはそれぞれ 1 課ある。最上級の 5 年生後期テキストにあたる巻十には偉人伝系は 4 課あるが、巻一から巻九に向けて掲載は減少する。女学校は全員が最後まで学校にいるわけではなく、結婚のために途中で卒業する人もいる。そのため、多くの女学生が在学している三年生までに、授業で偉人伝を扱い、こういう人になりなさいということを教えていたのではないかということが考察できる。 [文責：傳田 東山]

### 3. 3 頻出作家

どのような作家・文筆家が好んで取り上げられたのかも、特徴をつかむ上で重要である。

頻出 4 作家の概要と『六訂』採録教材は以下の通りである。

(1) **徳富蘆花**(登場回数 10 回/全 294 課)

本名は徳富健次郎。兄は徳富蘇峰。キリスト教の影響を受けトルストイに傾倒。受洗している。

【採録】秋分(巻 1) 村の秋(巻 2) わが故郷(巻 3) 冬(巻 4) 嫩草山(巻 4) 江津川(巻 5) 嶽雪(巻 6) 鵜戸窟(巻 7) 月の天橋(巻 8) 村の秋(巻 9)

(2) **大町桂月**(登場回数 6 回/全 294 課)

詩人、評論家、随筆家。『明星』で発表された与謝野晶子の「君死に給ふことなかれ」を『太陽』にて批判した人物。紀行文や随筆の美文で知られた。

【採録】人の運(巻 1) 泉岳寺(巻 2) 金剛山(巻 2) 九十の春光(巻 7) 病院(巻 8) 大原の里(巻 10)

(3) **芳賀矢一**(登場人物 6 回/全 294 課)

国文学者。国文学研究の開拓者といわれる。国定教科書の編纂にも関与。

【採録】國花(巻 1) 虫の音(巻 3) 女子の同情(巻 4) 九月十三日の夜(巻 5) 交学と気品(巻 8) 月雪花(巻 10)

(4) **武島羽衣**(登場回数 5 回/全 294 課)

歌人、国文学者。古典的な美文をもって知られた。有名な詩に滝廉太郎作曲「花」がある。

【採録】やさしの望(巻 1) 漁村(巻 3) 初日影(巻 4) 筆の歌(巻 5) さざれ水(巻 7)

なお、これら 4 作家に続く頻出作家には、相馬御風、藤岡作太郎(各 4 課)、夏目漱石、島崎藤村、森林太郎(鷗外)(各 3 課)がいる。

巻一から巻十に掲載されている作品の作者のうち、30 人以上が 2 回以上使用されていることが分かった。どの作者も現代で代表作として挙げられるものは『六訂』にはあまり掲載されていないように感じた。現代の授業でも扱われている漱石、藤村、鷗外などは、やはり複数作使われていたが、今の教科書に掲載されている作品とは少し違いがあるように思う。頻出作家の多くが美文で有名な作家であることが教科書に採用される理由とつながりがあるとみられる。

[文責：大塚 下釜]

### 3. 4 口語文の占める割合

井上(1981)によれば明治 35(1902)年刊行『女子』の「文体は文語文中心で、口語文は一割程度で消極的な採用である」。初版から 20 余年くだった大正 13(1924)年に発刊された『六訂』では、口語文教材の採用はどのように変化したか。

資料 4：『六訂』の口語文と文語文しらべ

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	合計
全課数	30	34	34	32	30	34	24	28	26	22	294
内 口語文	20	19	16	13	11	11	7	11	8	5	121
内 文語文	10	15	18	19	19	23	17	17	18	17	173

資料 4 を参考に算出すると、『六訂』全体に占める口語文の割合は約 4 割となり、『女子』から

『六訂』までの 20 余年の間に口語文教材の採用が 1 割から 4 割へと伸びたことがわかる。

[文責：山田 秋山 橋本]

### 3. 5 口語文教材採用の背景

明治 35 (1902) 年刊行『女子』巻頭の序文(「例言」)によると、ここに採用した文章は「口語文、普通散文、書翰文及び韻文」、「漢文の書き下し」とある。

「普通散文」とは「即ち当今通用の時文」であり、「現代の思想を述べ感情を叙し乃至一般開化の現状を写し出すに最も適当せる文体たり」との説明が続く。三浦(2007)によれば「時文」とは「明治末期から大正初期にかけて、当時の論壇の執筆者たちの主たる文体だった文語体の文章」であり、彼ら知識階層は「時文」を「確立しつつある文体」として認識していたという。近代化を急ぐ日本が、「標準文体」なるものを模索していた時期の話である。

なぜ「標準文体」が「模索」されたのか。国家の近代化とは、言葉を一握りの階層に委ねることを辞め、おしなべて読み書きのできる国民を育成することである。近代学校教育の普及以前において、最もポピュラーだったのは漢文訓読体であり、国民全てが習得することは難しかった。つまり「文体改良」すなわち「知的階級差を超えた文章の平準化」は近代化の喫緊の課題であった。

翻ってわたしたちは、三浦が「文語体から標準文体を造る可能性を模索する時期」と価値づけた「標準文体模索」期を、言文一致体の模索、言文一致運動期と学んできた。「言文一致」という用語には揺れが伴う。この問題を指摘した野村(2013)は、「言文一致」は「『書き言葉』の問題」であり「『書き言葉口語体』の創出を意味」するものと用語を再定義している。言文一致運動は国民の啓蒙を目的としていたが、日本人のそれまでの思考の変革を促す、大がかりな運動であったとも言える。

言文一致運動は一直線に進まなかった。山口(2003)によると、明治 20 年代の国文学者らによる「普通文」(「平安時代の文法にのっとりつつ、明治時代の言葉を活かして綴る文章」)推進の動きを受けて、新聞・教科書は次第に「普通文」で記されるようになり、「口語文の樹立を目指す言文一致運動は押さえ込まれ」てしまう。

ここで『女子』の序文(「例言」)にもどって「口語文」の採用をめぐる断り書きに着目すると、「標準語の未だ確定せざる今日、口語文を読本中に挿むはすこぶる困難のこと」だが「生ける国語を教ふるが国語科の第一義」であるから「毎巻必ず二三課を口語文に割く」ようつとめるとあり、「標準文体」の模索と言文一致化という時代を背景にした文言であることが分かる。

### 3. 6 不思議な演習問題の考察を通してわかること—「口語を文語に改めよ。」

では、「口語文」教材と、「普通散文」(「時文」「文語文」)教材は、なぜ並行して学ぶべきものとされていたのか。

問いを導く手掛かりとして、明治 39 年刊行『再訂』の不思議な演習問題を考察してみたい。

六版ある『女子国語讀本』のうち課末に演習問題があるのは『再訂』のみであり、『再訂』の「目次」にのみ、該当作品名の後に「口語文」の記載がある。

『再訂』巻一の具体を考察していく。巻一には口語文教材が 8 課(4,7,12,15,19,20,27,32)あり、第 27 課以外は演習問題がある。まず、問いの文体に着目してみる。第 4 課の間(2)は「この文の中にていづこが最も人を感動せしむるか。」とあるが、これは口語体をすすめる人の問いかけであろうか。平成の 17 歳には文語体にしか思えず受け入れがたい。私たちがわかりやすく書き直すのならば次のようになるだろう。「この作品の中で最も感動するのはどの部分か。」

第 15 課、第 20 課、第 32 課には、次のような不思議な問いがある。(下線は発表者による。)

第 15 課(3)左の文句を普通の文語に改めよ。

『どんな事でも恐ろしいと思ったことはありませんでした。』

第 20 課(3)左の文句を今日の普通文に改めよ。

『蟻が出て引っ張り込もうとする。』

第 32 課(1)左の口語を文語に改めよ。

『人は苦勞して育たなければ役に立たぬ。』

口語文を学ぶ教材の演習問題に、なぜ、口語を文語に改める問題があるのか。時代は文語から口語へという流れだったのではないのか。考えられるのは、たとえば、第 20 課のテキストは観察文・記

録文の類であって、ここから発展して評論文を書く力として、文語を書く力が求められたということである。背景に、文語が価値高いものとして身につけるべきであるという考えがあったことが考えられる。

同様に、巻二の口語文と演習問題の状況をみていく。巻二には口語文教材が 10 課 (5,8,11,15,16,17,20,24,28,29) あり、第 15 課と第 28 課以外は演習問題がある。

「不思議な問題」をそのまま抜き出してみる。(下線は発表者による。)

第 5 課(1)左の文句を文語になほせ。

第 8 課(4)左の口語文を普通文になほせ。

第 11 課(2)左の各語を文語になほせ。(3)これも文語になほせ。

第 16 課(3)左の文を文語文に改めよ。

第 17 課(1)口語文を文語文に改めよ。

第 20 課(1)口語文の語句を文語に変へよ。

第 24 課(3)口語の語句を文語体になほせ。

第 29 課(2)左の文句を文語体になほせ。

第 8 課(4)の問題文は『海岸砲及び、攻城砲と云って野戦砲よりはずっと大きい大砲を使ふ。』である。テキストのジャンルは「戦争」のものであり、新聞にのるような報道文である。新聞を読める人には解けた問題なのではないだろうか。

巻三以降は口語文のテキストそのものが減る。巻三の口語文教材は 5 課 (3,4,8,17,25) あり、第 3 課以外は演習問題がある(第 4 課(4)左の口語を文語になほせ、第 17 課(2)語句を文語に改めよ)。巻四の口語文教材は 4 課 (3,11,20,21) あり、第 3 課 ((4)語句を文語になほせ)・第 11 課 ((2)左の文句を文語に改めよ)のみ演習問題がある。巻五の口語文教材は 3 課 (5,15,23)、巻六は 2 課 (3,11) あり、いずれも演習問題つきである。巻七から巻十に口語文教材はない。

上記の考察から、文語文を読み書きする力が女学生に求められていたということがわかる。以下はわたしたちの気づきである。「新聞を読めるようになるためか(新聞の文体はなお漢文訓読体だったから)」「戦争の戦況を知るためのメディアは当時新聞しかなかったのだろう」「科学読み物の場合は、観察文や記録文で、論文も漢文訓読体であったのではないか。だから文語文を読み書きする力が必要だったのではないか。」「この時代には文語体を書く力を鍛えること、文語体を学ぶ価値が認められていたのでは。」「巻二に文語変換問題が集中している。早いうちに文語を読み書きする力を習得させるためか。」(文語変換問題数/巻一=3、巻二=9、巻三=2、巻四=2、巻五=0、巻六=1)

[文責：大倉 田中 傳田 橋本 東山 増井 山本 吉澤 吉田]

### 3. 7 文語文が読み書きできることの意味

前項の問いを再び取り上げたい。「口語文」教材と、「普通散文」(「時文」「文語文」)教材は、なぜ並行して学ぶべきものとされていたのか。三浦(2007)の以下の言を参照したい。

明治以後の近代文章史は、文語と口語の並行する二つの流れがとぎれることなく継続していたことを認めざるを得ない。小説から始まった口語文の流れは、大正末の新聞の社説の口語化によって一つの完成に達した感がある。文語文は長く、法律の条文、公文書、ジャーナリズムにおける評論等に用いられ、とりわけ評論は「時文」という独自の文体によって一時代を画したが、やがて口語文へと合流する。一方で、学校教育は、口語化を推し進めながらも、戦後の教育改革に至るまで「正格」としての文語文教育の姿勢を崩してはいない。

すなわち、言文一致運動があろうと、どのような平易な文体が近代の文体として模索されようと、大正期の日本では依然、「『正格』としての文語文教育」の価値が認められ、公的な文章は文語文だとする考えが根強かった。そして、この時期も、文語文の読み書き能力の価値はゆるがせにできなかったという事実を、『再訂』の巻末問題や、『六訂』の文語文教材の半数を占める採用からみてとることができる

### 4. 『六訂』の内容分析

以下、前掲の資料 3 「『六訂』の主要ジャンル」の順に考察結果を示していく。

#### 4. 1 偉人伝

**具体** 『六訂』の偉人伝の具体を以下、列挙する。(☆：皇族 ○：女性 ●：男性)

- 巻一 ☆第8課 皇太子妃殿下(明治天皇)  
○第22課 佐藤つる…岡山県後月群出部村(一般人)  
☆第24課 明治天皇の御遺物  
○第25課 乃木大将夫人=乃木静子…幕末、明治期の女性で陸軍大将・乃木希典の妻
- 巻二 ○第10課 瓜生若子…慈善事業の人  
○第24課 孝女いち \*孝女…親孝行な娘(一般人)  
●第25課 名人団平=豊沢団平…文楽義太夫節三味線の名跡
- 巻三 ☆第2課 皇太子殿下の御幼時  
○第11課 紅蘭女史(華族)  
●第24課 蜀山人の盆灯籠 蜀山人=大田南畝…天明期の代表的文人・狂歌師であり御家人  
●第26課 大石良雄と忠僕八介 人形浄瑠璃・歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』で有名  
●第32課 松平信綱…江戸時代前期の大名で武蔵国忍藩主
- 巻四 ○第2課 千代女=望月千代女…戦国時代における信濃巫の巫女頭  
●第17課 豊臣太閤の文事
- 巻五 ●第9課 徳川光友の室 徳川光友…江戸時代前期の大名。尾張藩二代目藩主。  
○第14課 マヂソン夫人  
●第18課 黒井繫乃(一般人)
- 巻六 ●第29課 日蓮上人
- 巻八 ●第3課 明治の偉人伝
- 巻七、九、十 なし

**考察** 特徴として、皇室系は各巻の冒頭に掲載される。前半の巻では女性の偉人伝が多く、後半にかけて男性が多くなる。女性の偉人伝では家庭的で親孝行な一般の女性が多く紹介されている。これは、中学校の前半の間に女性とはこうあるべきだという考えを植え付けておくためだと考えた。

[文責：井上 島崎 山本]

#### 4. 2 皇室

**具体** 『六訂』の皇室系教材(全9課)の具体を以下、列挙する。

- 巻一 「皇太子妃殿下」「明治天皇の御遺物」  
巻二 「皇后宮の御淑徳」  
巻三 「皇太子殿下の御幼時」  
巻四 「バッキンガム宮殿に於ける東宮殿下」「皇室に関する敬語」  
巻五 「十二徳」「禁庭の野分」  
巻八 「明治天皇御製」

**考察** ・巻一～巻四の著者は皇族ではなく、巻五・巻八は皇太后、天皇の作品である。

- ・「皇太子妃殿下」「皇后宮の御淑徳」「皇太子妃殿下の御幼時」：皇太子、皇后を讃える文章
- ・「皇后宮の御淑徳」：女性のあり方について(→皇后を例に出して示す)
- ・「バッキンガム宮殿に於ける東宮殿下」「明治天皇の御遺物」：日記風

特に「皇后宮の御淑徳」には良妻賢母思想などの当時の考え方の影響が大きく表れており、天皇・皇太后による日記風の文章は皇室についての知識を身に着けるためではないかと考えられる。

[文責：吉田光希]

#### 4. 3 紀行文

**具体** 『六訂』の紀行文の具体を以下、列挙する。

- 巻一 第30課 山村(相馬御風) 口語文、歴史的仮名遣い  
山奥の三面村という集落に訪れた役人が、そこで何日か村人にもてなされる様子が書かれている。村はどこか浮世離れしており、変わった風習や独特の文化の中で生活するうちに、別れ際、役人はこの村に懐かしさを感じるようになる。
- 巻三 第22課 水の都(高安月郊) 口語文

「水の都」と呼ばれた大阪の川について述べている。街を歩くより船から見る大阪の風景の方が良いとし、最近では電車が主流になって川鈴美が減ったことを嘆いている。

卷三 第 27 課 飛騨の山中より (遅塚麗水) 文語文

飛騨の近くの旅館に立ち寄り一泊する話。赤痢が流行していたり、鮎が高かったり、暗い話題が多い。難しい。

卷四 第 9 課 鶴が城 (大瀬伸) 口語文

若松の名所である鶴が城を巡りつつ、城に加えられた当時の人々の工夫を写真を交えながら紹介している。

卷六 第 21 課 吾妻路 (阿仏尼) 文語文、歴史的仮名遣い

富士川→伊豆の国府→箱根→湯川→酒匂→鎌倉を巡り、それぞれの土地で和歌を詠む。出典がかなり前なので、おそらく古典教材として採用されたと考えられる。

卷七 第 17 課 旅行 (山路愛山) 文語文、歴史的仮名遣い

難しく何を言っているのかよくわからなかった。出典は最近だがおそらく古典。

卷七 第 18 課 越路 (尾崎紅葉) 歴史的仮名遣い

汽車に乗って佐渡島を通る様子が書かれている。地図が載っている。

卷七 第 23 課 鵜戸宿 (徳富健次郎) 口語文、歴史的仮名遣い

鵜戸神宮を歩く中、自然を母胎、自身を自然の子と例え、自然に対する敬愛の念が文章に現れている。朝日や海などの情景描写が美しい。神社の写真が何枚か載っている。

卷八 第 11 課 月の天橋 (徳富健次郎) 口語文、歴史的仮名遣い

水面を宇宙に例えるなど、比喩表現が多く見られた。月の描写が多い。天橋立の写真と地図が載っていた。

卷九 第 19 課 東路の旅 (未詳) 文語文、歴史的仮名遣い

各地を旅し、歌を詠んでいる。関係のある歌人について述べられている場所もある。地図あり。逢坂の関 - 蟬丸、粟津京 - 天智天皇、勢田の長橋 - 満誓沙彌、篠原、武佐寺、老蘇森、醒が井 - 西行、株瀬川。

卷十 第 12 課 奥の細道 (松尾芭蕉) 文語文、歴史的仮名遣い

芭蕉の俳句と共にたくさんの名所が紹介されている。現代でも有名なテキストなので、これも古典教材と考えられる。

**考察** 古文など、文章が難しいものが多く、女学生たちに日本各地を紹介すると同時に、国語的な内容を学ばせる目的があったと考えられる。また、当時ではなかなか行けないであろう場所も、写真や地図を用いて想像しやすいようになっている。 [文責：大西 吉澤]

#### 4. 4 震災・戦争

**戦争関連教材** まず、私たちの中学校既習教科書（三省堂「現代の国語」、東京書籍「新しい国語」）から戦争教材を取り出してみる。

中1 あまんきみこ「雲」

中2 向田邦子「字のない葉書」 茨木のり子「私が一番きれいだったとき」 「平家物語」

中3 菊池寛「形」 荒巻裕「平和を築く」 野坂昭如「凧になったお母さん」

次に、『六訂』の戦争関連教材を取り出してみる。

卷五 「空行く雁」

卷七 「櫻井の宿」「母の教訓」

卷八 「有王島下り」「忠度都落」

卷九 「落花の雪」「熊野落」「敦盛の最期」「扇の的」

卷十 「重盛諫言」

**考察** 巻五で初めて戦争教材が出てくる。以降は後半に多く取り上げられていた。「平家物語」や「平治物語」からの採用が多く、書き言葉の練習として使われていたのではないかと考えられる。また、学年が上がるにつれて文語体の作品が多くなっていることにも関係があると考えられる。

**震災関連教材** 関東大震災の発生は大正 12 (1923) 年 9 月 1 日であり、『六訂』の刊行はその翌年のことであることを考えると、巻一第 20 課「震災記」と巻十第 10 課「大正の震災」は、短期間で採用

の決まった教材だと言える。以下は二教材の詳細である。

#### 卷一 第20課 「震災記」(加納作次郎)

出典：大正12年10月号初出「文章倶楽部(第8年第10号)」

文体：歴史的仮名遣い、口語文

内容：「関東大震災」の体験記。「私の最も恐れたのは火災であつた。大地震の後にはきつと火災が伴ふことを知つてゐたし、好晴ではあつたが、二百十日の大荒れを想はせる南の強風が吹き募つてゐたし、おまけに水道が地震と同時にぱつたり止つて了つたし、丁度昼飯時の火の気のある時だつたから、若しやと思つて非常に心配だつた…」作者の心配通り関東大震災では木造建てであつたたくさんの家が火事となり、その火事によって被害は拡大した。家だけではなく、たくさんの建築物が燃えた。その他も避難の様子など、実際、作者が体験した様子、感情がリアルに細かく描かれている。

#### 卷十 第10課 「大正の震災」(坪内逍遙)

出典：1923年9月23日「週刊朝日」

文体：歴史的仮名遣い、口語文

内容：「関東大震災」の評論文。「震災記」とは違い、体験記というより関東大震災が起こった事実を嘆いている評論文に近い。先の第一次世界大戦で傷ついた外国と対称的に、自然の力で傷ついた日本を「明治以来駭々として進んだわが文化が此の世界的改造期に於て一六七年以上の停滞を余儀なくせしめられることは、非常に大きな損失である」と今後の日本を予想し苦言を呈している。その一方で「遅ればせながら、恐ろしい目に合ったものだ。が、必ずしも悲観すべきでない。個人でも国家でも、とにかく多幸多福であると他人の、また他国の嫉妬や憎悪を招く習だが、甚だしい災厄は敵人の僻み心をも和らげることがある。」と日本の復興と、また、若干皮肉交じりにだが他国との関わりを増やしていこう、と、この災害を前向きにとらえて締めくくっているのが特徴的である。 [文責：村上 吉田眞生]

### 4. 5 外国

具体 『六訂』の外国関連教材の具体を以下、列举する。

- 卷二 第9課 動物の天国(上原敬二) 欧米は動物を愛護し、日本人は冷たいと比較している。
- 第15課 頓智究明(著者不明) 英国ロンドンを舞台にした物語である。
- 第16課 貨幣礫(三浦修吾) バルセロナ、ゼノアが出てくる物語である。
- 第18課 自由の神(原田一郎) 自由の女神を見、設計士(フランス人)を賛辞している。
- 第29課 ペンギン鳥(杉村太郎) 南極の景色を紹介。極夜、白夜の説明もある。
- 卷三 第15課 南洋(著者不明) スマトラ島の暑さ、果物、花や葉の色彩、雨の爽快さ等を紹介。
- 卷四 第1課 バッキンガム宮殿における東宮殿下(溝口白羊) 英皇帝陛下を「華やか」と描写。
- 第11課 紐育(著者不明) ニューヨークの紀行文。「大」と表現している。
- 第26課 極地の探検(著者不明) 探検を学術的とし北極と南極への冒険を科学的に説明。
- 卷五 第5課 戦時のパリ(島崎藤村) パリの学生をみて、昔の自分と比較している。
- 第6課 鍵の室障子の家(河上肇) 日本の家は開放的で西洋の家は仕切られていると比較。
- 第7課 旅館(厨川白村) 日本の旅館は不愉快で、外国のホテルは良いとしている。
- 第25課 香港(水野徳) 香港の地形、人口、輸入、植林事業などを説明している。
- 卷六 第15課 英独仏の国民性(和田垣謙三) 英は動的で仏は静的で、独は双方に該当と考察。
- 第16課 ヒマラヤ紀行(著者不明) 日付時刻の明記は日記調。「荘嚴」「雄麗」と表現。
- 第31課 蘭人の趣味 オランダ人は自然に対し深い趣味を有していると説明している。
- 卷七 第13課 ウェストミンスターとパンテオン(河上肇) 紀行文で思想家小説家発明家紹介多。
- 卷八 第13課 ワシントンの母(著者不明) 偉大なる品格の要素は我が国の女性に必要なと述べる。
- 第27課 カルナバル祭(菊池幽芳) パリ年中行事の体験のようすを説明している。

考察 紀行文、随筆、物語など様々。日本と比較している文章があるが、外国のことを悪く言っているものはない。逆に日本が外国を見習うべきだという主張が読み取れるものがある(卷二第9課、卷五第7課、卷六第31課、卷七第19課)。外国に対して、日本より進んでいるイメージをもっていたのかもしれない。また紀行文を読んで、広大な外国にあこがれを持っていたのかもしれないと感じた。当時簡単には外国に行けなかったし、映像で情報を得ることもできなかったのので、女学生たちは話を読んで想像を膨らませていたことがうかがえる。 [文責 増谷]

#### 4. 6 随想

前掲の頻出4作家（徳富蘆花・大町桂月・芳賀矢一・武島羽衣）を参照されたい。彼ら国文学者、随筆家の作品群が『六訂』の基調であり、随想はその最たるジャンルである。共同研究ゆえのむずかしさで、考察が多岐にわたり、ここでの作品群の考察は控えることとする。

#### 4. 7 科学読み物

**具体** 『六訂』の科学読み物の具体を以下、列挙する。

巻二 第27課 「深海」（飯島魁）深海は何もかも無く、死の国だと述べる。

第28課 「ペンギン鳥」（杉村広太郎）目にする事の珍しいペンギンの生態を描く。

巻三 第14課 「珊瑚礁」（若林欽）海外の珊瑚礁を鮮やかに描き美しさを感情的に紹介する。

巻九 第7課 「万法一如」（姉崎正治）さまざまな科学の偉人を紹介し、共通点を述べる。

14課 「七夕の空を仰ぎて」（新城新蔵）織姫・彦星の二星を中心に天文学を論じる。

**考察（共通点）大きな絵**：文章でも十分わかりやすいものになっているが、やはり見たことがないものはイメージがしにくい。絵によって一層わかりやすく、ちゃんと理解できるようになっている。**独特な感情表現**：「美しい」「素晴らしい」などの言葉が惜しみなく使われている。「ペンギン鳥」では、筆者が本当にペンギンに惚れ込んでいるようで、比喩表現を使って、ペンギンの可愛らしく愛くるしい様子をよく伝えている。少し主観的に思える部分もあるが、このくらいの熱意があるからこそ伝わるものがあるのだと思う。私はここを初めて読んだとき思わず笑ってしまった。それから、「珊瑚礁」は完全な主観だろうと思ったが、ではいったいどんなのだろう、そんなに言うなら一回見てみたいという気も起こった。**余韻**：最後の一文に決め台詞が持ってこられている作品が多い。自身の意見をまとめた、少し大胆な結論が述べられている。ペンギン鳥以外の私の調べた全てに見られた。読者に強く印象付けるためかと推測した。これらの作品は、事実を学ぶだけでなく、伝える技術を身につける役割もあると感じた。〔文責 増田〕

#### 4. 8 文学

散文と韻文、それぞれについて考察を試みた。

##### 4. 8. 1 漱石と鷗外の『六訂』での扱い

(1) 漱石：なぜ『六訂』に現代の定番教材「こころ」は収録されていないのか。

この作品から、当時の理想の女性像（貞操観・良妻賢母など）が学べないからだろう。理想の女性像とエゴイズム（利己主義）は対極にあるように思う。この作品が、山の手の新興エリート層の男性に向けて書かれたことも関係しているのではないだろうか。

そして今、私たちが「こころ」を学ぶ理由は、一人の人間としてエゴイズムや倫理観を考える必要があるからだと思う。

(2) 鷗外：なぜ（巻八第18課）「安井夫人」と（巻七第2課）「高瀬舟」が収録されているのか。

小説「安井夫人」では、焦点は安井息軒ではなく妻となった佐代にあてられている。「仲平が、天下の大儒安井息軒となりおほせたについては、誰がお佐代さんの内助の功を否まれよう。」とあり、お佐代さんを褒めている。女学生に女として、妻としてのあり方を考えさせるためにこの小説が掲載されたと思われる。

小説「高瀬舟」は人の既成概念を二つの観点「知足」「安楽死の是非」から揺さぶることにより、一つの価値について考えるきっかけとなるものだ。時代に関係なく「高瀬舟」が教材化される理由だと思う。加えて、今の私達よりも「知足」の考え方は昔の女学生たちに当てはまるように感じた。

〔文責 田中 増谷 大塚 増井〕

##### 4. 8. 2 『六訂』の詩・俳句・短歌

**口語と文語**：口語詩が5（巻二に2、巻一、四、六に各1）、文語詩が31。文語詩の割合が高い。

**詩と俳句・短歌**：全294課中、詩の収録は22、俳句・短歌は14。

**俳句・短歌** 古典が多い。巻八には天皇に関する短歌あり。巻十に当時の「現代もの」あり。

**詩の考察** 自然の情景と家族を絡めている作品が多い。現代にも伝わる詩や、童謡の歌詞になっている詩（巻一、二、六）もあり。おおかたは明治から大正の同時代作品。武島羽衣は五作品収録

(他作家は1ずつ)。武島羽衣：明治5(1872)年生—昭和42(1967)年没。日本の詩人、国文学者、作詞家。宮内省御歌所寄人。京音楽学校(現在の東京芸術大学)などの教授を務めた。晩年は日本女子大学で教鞭をとり、同時期に聖心女子大学・実践女子大学でも国文学を講じるなど、女子教育に尽力した。代表作は唱歌「美(うるわ)しき天然」「花」の歌詞。〔文責 増井〕

#### 4. 9 書簡・手紙文

**具体** 『六訂』の書簡・手紙文の具体を以下、列挙する。

卷一 第3課「姉に」 口語体

高等女学校に入学した女学生が、同じ学校に通っていた姉に向けた手紙。姉の頃と変わった学校の様子を伝えたり、家族の最近の様子などを書いている。

卷一 第18課「暑中見舞い」 文語体

題名の通り、休暇中の学生が家族に宛てた暑中見舞い。かしこ。で終わっている。

卷二 第23課「田舎の祖母に」(樋口一葉) 文語体

冬に、両親に宛てた手紙。家族の心配、伯父伯母の様子についても書かれている。また、一緒に羊羹を送っている。かしこ。で終わっている。

卷三 第4課「田舎より」(藤岡作太郎) 文語体

昨年の秋に家族で田舎の方に引っ越してきた学生の手紙。田舎の美しい景色と季節について綴っている。拝啓で始まり、草々で終わっている。

卷四 第6課「紅葉の便り」(佐々木信綱) 文語体

題名の通り、秋の紅葉や自然の様子を綴った手紙。かしこ。で終わっている。

卷四 第30課「初雛を贈る」(樋口一葉) 文語体

五人から千代子様(赤ちゃん)の初節句のお祝いを差し上げるという内容。

卷五 第11課「修善寺より」(尾崎紅葉) 文語体

作者、尾崎が病気療養のために修善寺に行ったときのことを書いている。途中で修善寺の写真が挿入されており、名所案内も入っている。

卷六 第10課「留守宅へ」(細井平洲) 文語体

間に歌をはさみながら、貞節などについてかかれてある。

卷六 第33課「都に着きて」(樋口一葉) 文語体

手紙の書き手は初めての一人旅で伯母の家に来ており、そこでの出来事等を書き連ねている。

卷八 第15課「國許なる姉に」(下田歌子)

故郷の姉への返事。自分の勉強への取り組みを綴り、手芸科の編み物を贈る約束をする。

卷九 第16課「人の新盆に」(樋口一葉) 文語体 妹の死の悔やみの電報。

**考察** 家族宛(卷一第3課「姉に」、18課「暑中見舞い」、卷二第23課「田舎の祖母に」、卷六33課「都に着きて」、卷八第15課「國許なる姉に」)もあれば、差出人と受取人の関係が特定できないものもある。11課のうち5課が家族宛であり、比較的家族宛の手紙が多いことが言える。口語体は卷一第3課「姉に」のみで、あとはすべて文語体と、圧倒的に文語体が多い。樋口一葉の作品が多く(卷二第23課、卷四第30課、卷六第33課、卷九第16課)、一学年に一作品は樋口一葉の手紙・書簡文を勉強していたことがわかる。〔文責 大倉 田中〕

#### 5. 大和和紀『はいからさんが通る』を通して学ぶ大正時代・女学生文化

『六訂』の併読テキストに大和和紀『はいからさんが通る』を用いた。以下は、『はいからさんが通る』を用いた学習のまとめである。

##### 5. 1 『はいからさんが通る』が描く関東大震災

『はいからさんが通る』は『女子國語讀本』の使用されていた大正時代を主舞台とした大和和紀による漫画。『週間少女フレンド』(講談社)に1975年から1977年まで連載された。1977年に第1回講談社漫画賞少女部門を受賞。大和和紀の描く漫画のヒロインは、どの作品でも“自立した女性”である。『はいからさんが通る』の花村紅緒もそのうちの1人だ。紅緒のような自立した女性は当時の普通というわけではないと思うが、『はいからさんが通る』の全てがフィクションというわけではない。例えば大正デモクラシー、シベリア出兵、女性の社会進出、反政府主義者に対する弾圧。中でも印象的

な場面に使われているのが関東大震災だ。『はいからさんが通る』において関東大震災は、紅緒と伊集院少尉の恋のクライマックスの場面(講談社漫画文庫 はいからさんが通る (4) 冒頭)にあたる。一度は少尉への愛を封印し、自分を愛してくれる冬星との結婚に踏み切った紅緒。しかしその結婚式当日、関東大震災が東京を襲ったのだ。燃え盛る炎の中に取り残された紅緒を救うのは…? 『はいからさんが通る』はアニメ(1978年6月-1979年3月)、ドラマ(1979年4月-1980年8月)、映画(1987年、2017年)など様々な形で昭和、平成に生きる人々に大正時代の人々の様子を伝える貴重な作品だと言えるだろう。 [文責秋山]

## 5. 2 『はいからさんが通る』の舞台設定と主要キャラクター造型

作品に登場する「跡無女学館」は実在する「跡見学園」がモデルとされている。他にも、主人公紅緒の勤務先「冗談社」も本作の出版元「講談社」に由来している。

主人公・花村紅緒：跳ねっ返りのじゃじゃ馬娘でよく騒動を起こす。特技は剣道槍道、軍人の忍とも互角に渡り合うほど。家事全般は苦手。劣等生だが英語は得意。行動は男っぽい、実は際立つほどの美人。黙っていれば、外見は愛らしく、その気立ての良さ、情けの厚さと芯の強さから、忍だけでなく、他の男性からも行為を寄せられる。

紅緒の許嫁・伊集院忍：陸軍歩兵少尉。普段は朗らかだが、皮肉やで笑い上戸。社交界の花形として女性に人気がある一方、文人たちともつきあいがある。日本人の父親と東ドイツ人の母親をもつが、祖父母に育てられた。画に描いたような優男だが、武道や格闘の術を心得ており、軍人として部下のために命を賭ける勇敢さも持ち合わせている。 [文責 山本]

## 5. 3 『はいからさんが通る』から「女性らしさ」について考える

舞台は大正時代だが、漫画『はいからさんが通る』の連載開始は1975年で、日本国内で女性の社会進出がごく普通になる少し前のことである。この時代は女性がどう働き、どのように生きていくのかを自分自身で考え行動する時代のひとつ前の段階だ。『はいからさんが通る』の主人公・紅緒は「進んだ女性」の象徴である。男性からの承認を求めず、自分のやるべき事を貫くことにより自分自身を肯定する強さを持っている。そして結果としてその姿勢が周囲の男性が紅緒を愛する要因となっている。彼女は性別というくくりから飛び出し、「女性らしさ」の代わりに「自分らしさ」を追求しており、それは『女子國語讀本』が大正時代の女学生たちに要求した姿とは正反対のものではないだろうか。大正の少女達がもしこの作品を読んでいたら、自分を貫くための良いバイブルとなっていたに違いない。そして「女性らしく」なることが本当に正しいのかどうかの疑念を抱く為の材料となっていただろう。(たぶんこの作品は小難しいことを考えずに楽しむものだと思うので、ぜひ気楽に読んで楽しんでほしい。) [文責 大塚]

## 5. 4 女学生進学は今昔

**女学校の歴史概略** 日本で初めて女学校が開設したのは1872年のことで、このころから森有礼らなどが女性の地位向上のため運動を始めていたが、その頃は女性の社会進出はまだわずかで、大正4年の女学校進学率は約5%である。

「美人」は卒業できない? 今では考えられないが、女学生は縁談が決まれば中途退学し、そのまま嫁入りするのが普通のスタイルだったようで、有名な話が「卒業面」という言葉が存在したことだ。これは「不細工すぎて在学中に縁談が来ることはなく、間違いなく卒業できる顔」としている意味である。こんな言葉が生まれるほど女学校での中途退学は当たり前のことだったようだ。

現代の進学率 平成25年度の高等学校等への進学率は女子96.9%、男子96.2%と女子の方が若干高い。大学進学率は男子54.0%、女子45.6%と男子の方が8ポイント高い。短期大学進学率を合わせると女子の大学等進学率は55.2%となる。近年、大学への女子の進学率は上昇傾向にある一方である。

**大正～昭和前半の進学率** 女子の尋常小学校就学率がほぼ100%になる1910年あたりから徐々に高まり、1920年には9%、1925年には15%近くまで上昇した。しかし高等女学校からの進学先は、高等女学校の専攻科及び高等科・師範学校の女子部・女子高等師範学校・女子専門学校・一部の私立大学などに限られ、実際にこれら高等教育機関に進学した者は第二次世界大戦期を通して1%に満たない。

まとめ 現在では中学まで義務教育であり、高校の進学率もほぼ100%と約150年の時を経て進学率は大幅に上昇した。卒業率については調べがつかなかったが、アニメ『はいからさんが通る』やNHKの

2014 年朝の連続ドラマ「花子とアン」の女学生時代の描写からうかがえるように、中途退学者はかなり多かったようだ。 [文責 村上]

## 5. 5 大正時代の女学生の服装

大正の女学生というとなんを身につけているイメージがあるだろうか。海老茶色の袴に矢絰柄の着物、そしてブーツ。髪は束ねて、可愛らしいリボンを結んで。そう、『はいからさんが通る』の主人公が着ていたあのコーディネートが、まさに当時の定番だった…と思う人が多いだろう。実はこの認識には一つ間違いがある。「ブーツ」の部分だ。

ブーツは確かに、当時流行りの履物だった。しかし当時の定番は「黒ハイソックスに黒の短靴」だった。家に入るときには靴を脱ぐという日本の習慣上、ブーツでは不便だったからこのようなスタイルになったといわれている。現在の女学生の履物とほぼかわらないことに私は驚いた。一説には、袴にブーツの組み合わせが今でも着られているのは『はいからさんが通る』人気の影響らしい。漫画のパワーはすごいと思う。

では、大正期の女学生の制服、特に袴について詳しくみていきたい。

袴の定番色は、海老茶色と紫色と言われている。海老茶色とは紫がかった茶色のことである。本来は海老ではなく、蒲菊と書いて山ぶどうの色を指していたが、そこから伊勢海老の色を示すようになり海老茶色と言われるようになった。また、跡見女学校が紫色の袴を取り入れ、こちらも定番となった。海老茶色の袴を着用した女学生は紫式部とかけ海老茶式部と呼ばれ、紫の袴の女学生は平安の歌人の赤染衛門になぞらえ紫衛門と呼ばれていたそうだ。洒落た呼び方である。

そして学生が着用する袴は、普通の袴とは少し違う。行燈袴というもので、女袴とも呼ばれる。行燈袴の特徴は、通常の袴は二股に分かれたズボンのような構造をしているのに対し、股の仕切りが無くスカートのような構造をしていることだ。また行燈袴は、通常の袴にある腰にあてる腰板が無く、前後の生地二枚は台形のような形をしている。それによって、あまり締め付けずに着用することができたようだ。そして、スカートのような構造をしているので、トイレの際に脱がなくても良いという利点がある。この構造から、女学生が動きやすいということもあり、行燈袴は広まっていった。また行燈袴を考案したのが、『女子國語讀本』に作品掲載のある下田歌子先生だった。

最後に私が衝撃を受けたのは、今まで紹介したスタイルは「大正初期」に流行ったものであって、それ以降は洋装、特にセーラー服が主流になったということである。そんなに早く、女学生の和装が廃れていたとは思っていなかったのが驚いた。日本で最初に洋装を採用したのは平安女学院で、礼拝奉仕する修道女的なイメージや、和服の着物襟に近くなじみがあるなどの理由で、セーラー襟のついたワンピースを採用して大変な人気となった。また、当時多くの学校の男子学生は立襟の学ランスタイルで、それが陸軍式の五つボタンだったので、女子学生は海軍式のセーラー服を制服として採用するようになったとも言われている。 [文責 増井]

## 6. 平成 17 歳男女による作品解題

協同研究の終盤に、それぞれの印象深い作品をひとつずつあげ、解題を試みた。

### 巻一第 8 課 「皇太子妃殿下」(馬上孝太郎)

皇太子妃殿下は、たとえ私たちと歳は同じぐらいだったとしても、その生活はまるでかけ離れているということは、その実際の生活を詳しく知らない私でも想像することはできます。ただ一つ同じなのは、「学校に通う」ということなのかなとこの話を読んで私は思いました。この話の主人公は「皇太子妃殿下」は、その名の通り皇族の一員であり、私たちと同じ歳の頃には「学習院女学部」で学生生活を送っていました。同じ学校に通う同級生は彼女の成績が抜群にいいことを「宮様だから。」と当たり前のようなこととして話していたと書かれているが、それは決して当たり前のことではなく、彼女の努力の塊だったのだと、元学習院女学部教授である筆者、馬上孝太郎は述べています。彼は実際に彼女が在学していた時の教授なのだから本当であると確信が持てます。「宮様だから。」などと言う人がいる一方で、彼女を尊敬し、彼女について行きたいと思っていた人も大勢いました。

この話を「女子國語讀本」に掲載した理由として、私が思ったのは、誰からも尊敬されるような皇族の人だって努力をしているのだということを伝え、女学生たちにこのような人間を目指して絶えず努力をし続けて欲しいというメッセージの表れではないかと思いました。私自身も、何事においても努力を怠ることなく、自分の一度きりの人生を充実させたいと思いました。 [文責 山本有紗]

### 卷一第 20 課「震災記」(加能作次郎)

この「震災記」は大正十二年に起こった大正最大の地震、関東大震災についての記録、及び体験文である。何時何分に発生し、自分の周りがどうなっていったのか、そして家族の様子、近所の人、そして火災、相次ぐ余震…これらが非常にリアルに語られている。

一番酷く描かれているのは火災について、それと東京の他の地域の惨状についてである。本人の言葉を借りると、「警視庁が焼けている。建設中のビルディングが倒潰して七八十人が死亡した。…神田の三崎町、神保町方面は既に全勝した。…神楽坂の銀行が倒れて交番が粉碎された…」など東京での惨状がとても鮮明に語られている。この本は巻一なので読んでるのはかなり私よりも年下の人たちだと思うのだが、これは本当にそんな子たちが読んで大丈夫なのだろうかと考えた。もう一つ、この教科書は大正十四年に印刷、発行されている。この地震が起きたのは大正十二年だ。この間はわずか二年しかないのも驚きである。この話はまぎれもなく実話だし、だからこそこの話は記憶に新しい大災害について触れ、最近のことに詳しくなる、いわば新聞のような扱いだったのかもしれない。今では信じられないようなことだが社会を知る手段の一つ「教科書」としては非常に的を射た話だと言えると思う。

話自体も情景がリアルに伝わってくる文だった。

[文責 村上愛結]

### 卷一第 21 課「水の御馳走」(島崎藤村)

私がこの作品を読んで思い出したのは小学校低学年のときに読んだ、工藤直子さんの『ふきのとう』でした。『ふきのとう』では雪や竹やぶ、そしてふきのとうなどが人間のように会話していて、『水の御馳走』では楓が「わたし」に声をかけるところから物語が始まります。この「楓」はもちろん人の名前ではなく、植物の「楓」です。話の中に人間が出てくるか出てこないかという違いはありますが、人間ではないものが人間のように会話をしているという共通点を持っているのでなんだか懐かしく感じました。あくまで私が覚えている限りですが、この作品のような少しファンタジーで和やかな雰囲気作品は女子国語讀本に他にはなかったように思います。作者が現代でも有名な島崎藤村であったことや、1 番最初に自分が分析などを担当した作品であったことも大きいかもしれませんがそれを抜きにしてもとても印象に残っている作品です。

[文責 下釜彩佳]

### 卷一第 25 課「乃木大将夫人」

私が選んだ一作は、巻一の乃木大将夫人です。実際に私と同じくらいの 16, 7 歳の子がこの時代に使っていたのは、巻八～巻十だと思います。しかし私が『女子国語讀本』の中で最も印象的で、一番初めに思い出したのはこの作品でした。

なぜこの作品が印象的だったかという、私が『女子国語讀本』の中ではじめて読んだ作品だから、口語文で読みやすかったから、というのももちろん含まれますが、内容などから考えても一番印象に残っています。日露戦争で活躍した乃木希典の奥さんの話で、当時の女学生にこんな風に生きなさいと教えるために使われた偉人伝だったんだろうと思います。現代の教科書には載っていないような偉人伝が載せられているという時点で印象的でしたが、違う時代に生きている私が読んでも、戦争の時代の中、夫のことを支えて、周りの人が女性の鑑だと思うように美しく強く生きていた女性がいたんだな、すごいなとても印象的でした。また、この時代のほかの授業のことはわかりませんが、私はこれを読んだ後、日本史の授業で日露戦争について習ったり、現代文の授業でやった夏目漱石の「こころ」に乃木希典の殉死のことが書かれていたりしたときにこの作品のことを思い出しました。

私の中でとても印象深く残っているので、この作品を選びました。

[文責 傳田美雨]

### 卷一第 27 課「まことの愛」(柳澤淇園)

私の一番印象に残った作品は柳澤淇園「まことの愛」である。

「まことの愛」のストーリーは、主人公の子どもが大人になってから両親のことを思い出しているものだ。しかし両親といっても、実の両親ではない。主人公は、二歳のときに実の母を亡くし、実の父と継母に育てられた。七歳頃から、大正時代の当時の女性が必要であった裁縫を教える継母と、絶対に主人公が書いた作品を褒めない父。なかなか厳しい環境だった主人公も大人になり、親のことを感謝している。

私が、韻書に残った理由は継母という登場人物がいたからである。今の時代、私のイメージではあるが、継母は子どものことをあまり愛さない、虐待をする、育児放棄をするといったマイナスの印象が強い。一方、「まことの愛」に出てくる継母からは厳しいながらも子ども(娘)を一人前の女性に育ててほしいという愛を感じた。これは、あくまで推測だが大正時代の多くの継母が、「まことの愛」に出てくる継母のような人だと考えられる。

ところで私の祖父の両親はどちらも実の親ではなく、祖父を養子としてくれた夫婦である。そんな祖父もその夫婦から多くの愛をもらって育てられた。(母談)いつから、実の親ではないと、子を大切に育てないというマイナスの印象がついたのだろうか。ぜひ、「まことの愛」を今の 16, 17 歳にも読んで、親になることは、どういうことなのかを学んでほしい。

[文責 橋本香織]

## 卷二第4課「波の音」(相馬御風)

この作品は文語文で歴史的仮名遣いが使われている随想です。この作品を選んだ理由は、簡単に言うと読みやすかったからと読んでいて、すっきりとした気持ちになったからです。

この話は、作者である相馬御風が生まれ育った新潟県糸魚川市の話で、日本海の波をメインに書かれています。私の住んでいる大阪の近くには海はまずないし、自然を感じる事があまりありません。だからこの作品を読んだ時、新鮮な気持ちになりました。

「波の音」は三つの話から構成されています。一つ目の話には、「私」が田山花袋氏に書いてもらったという、短歌一首が登場します。短歌が入っていることで趣があって面白いなと思いました。そして、「海の波音が以前は気になり眠れなくなる夜もあったが今ではこの波音に親しみを覚え、この音が全く聴こえない土地には物足りなさを感じる」とあります。最初は苦手だったものが今ではとても好きになる、という文は私たちにも身近な体験であるし、希望を与えてくれる気がしました。二つ目、一つ目とは少し対称的で「波の静けさ」に好意を表している文です。「～な海、～な池、～な森」という書き方は読んでいてとても引き込まれました。そして、「静寂」「刹那」「魔女」というような、読み手が読んでいてグッとくるフレーズがたくさん散りばめられていました。読んでいて読み応えのある文章でした。三つ目は、他に比べてあっさりして最後の文として読みやすく適切だなと思いました。

この作品は、「波の音」はあってもなくてもすばらしい、その存在が立派なものであるというポジティブな文で、読んでいて清々しい波の様子が想像できる良い作品だと思いました。 [文責 東山真里亜]

## 卷三第19課「雑草」(幸田露伴)

「雑草といふものこそおそろしきものなれ」という衝撃的な一文から始まるこの作品は、読み始めたとき大袈裟なコメディかと思わせられた。茹くも抜いても焼いてもなくなり、人のための稲などを虐げ心のままに栄えていく…などとシリアスに書かれているのは、いかにも普通の雑草のイメージと大きく離れており、むしろ滑稽さを生み出していた。しかしその滑稽さを感じていられたのもそこまでだった。雑草は育てる花や実を残念な結果にさせる。もし雑草がなければどんな人でも一度植えたら良く育つが、雑草があるために、よく働き雑草を取る人と怠惰で雑草を放っておく人の間に結果の差が出る。最後の一文は、「雑草は人間の怠惰を警むる造花の鞭にやあらんと、おそろし。」である。私は読み終え、恐怖を感じた。雑草で、人の怠けた悪い根性が露わになってしまうとは、思いもしなかった。いや、もしかしたら、雑草だけではなく、いかもしれない。身の回りのものはいつだって悪い心を露わにするものになり得る。私たちは、常に身の回りのものに心を監視されているのである。

この作品はおそらく教訓物だ。私が数ある作品の中で特に印象に残っているのだから、当時の女学生にも深く考えさせただろう。初め、門戸が広く開け放たれていて気軽に入ってみると、そこには得体の知れない怪獣がいて、大きな口で噛みつかれたような衝撃。あるいは、奇妙な人がいて、ナイフで刺されたように、深く心に残る作品だなと思った。私の中にある悪い心をえぐるように刺さる。当時の女学生はこの作品がどこまで刺さったのだろう。しかしこれは三巻なので、私より若い子が読んでいたはずだ。やはり若い方が、感取性が豊かなのだろうか？とすると、この作品が十巻中三巻を手前の方にあるのも納得できる。それから、先述した最後の一文、この持ち主は本文に「」かぎかっこを書き込んでいた。先生に指示されたのか自身で書き込んだのかはわからないが、とにかくこの一文を強調しているということは、何かを感じていたのは間違いない。果たして何を感じ、それからの人生にどう活かしたのか興味は尽きないが、そこまで現代の私たちに考えさせる幸田露伴は凄いなと思った。 [文責 増田愛梨]

## 卷六第15課「英佛獨の國民性」(和田垣謙三)

私は最近、心理学や言語学に興味がある。この『英佛獨の國民性』も心理学の入門の文章にあたると言える文章であり、とても印象に残った。

イギリス人、フランス人、ドイツ人に「象は如何なる動物なるか」という質問を課したとき、それぞれどのようにして答えを出すかと言うことが書かれている。その答えの出し方に国民性が表れると著者の和田垣謙三は主張する。和田垣謙三は東京帝国大学を卒業後、イギリスの名門大学ケンブリッジ大学、ドイツの名門大学ベルリン大学で学んだ人物であるから、その時の経験をもとにこの文章は書かれたのだろう。

イギリス人はインドやアフリカに赴き、想像憶測を挟まない“本物”を、自分の眼で見て精細にメモを取る。しかし、まとまりがなく見にくいものとなる。フランス人は動物園に赴き、そこに繋がれた一頭について、寸法を測ったりしながらスケッチを描く。しかし、この動物園の象の姿は自然本来の象の姿とは言えないし、あまりに理路整然とした答案になってしまう。ドイツ人はイギリス人とフランス人の答案が完成して出揃ってから、その二つの答案を並べて良いところを組み合わせ、少しだけ自分の論を書き足す。内容は素晴らしいものになるかもしれないが、これでは一種の編纂的な答案で、オリジナルの答案とは程遠い。

本文の内容を要約するとこのようになるが、私が特に面白いと思ったのは、著者が最後に「それぞれの答案の長所・短所は同じところにある。」とまとめている部分。イギリス人の答案は動的であることが長所で

あり短所。フランス人の答案は静的であることが長所であり短所。ドイツ人の答案は動的かつ静的であることが長所であり短所。物事の二面性を端的に、それでいて正確にとらえた表現だと思う。

〔文責 秋山紀子〕

### 卷六第 28 課「安元の火」(鴨長明)

「方丈記」の中の安元の大火(1177年に京都で起きた大火災)について書かれている。三大随筆と呼ばれる方丈記だが、この話題では、事実を記録のように述べており、また、心情より事実を書いた文章のほうが多い。

「その中の人」以降の文章が長明の想像で書かれており、そこが印象的だった。火事の最中にいる人たちの様子が細かく書かれている。たとえば、煙にむせて倒れる人、炎に目がくらんでそのまま死んでしまう者、また身体一つでやっとのことで逃げ出したものの、財産を失ってしまった者。どれもバッドエンドで悲しい気持ちになった。

私は最後の文章を読んで、ハッとさせられた。「人の営みはみな愚かなものであるが、その中でもこれほど危険な都の中に家を作り、財産を費やして、神経をすり減らすことは、この上なくする甲斐の無いことである。」大都会大阪に住んでいるため、余計に心に響いた。人々は便利さや華を求めて大都会にやってくるが、大都市ゆえの震災の恐ろしさを理解しているだろうか。便利さの裏の代償に気づいているだろうか。私は、長明のように「する甲斐は無い」とまでは言わないが、私達のこのような震災が起こったときの準備をしておかなければならないと思った。

〔文責 吉田眞生〕

### 卷六第 33 課「都に着きて」(樋口一葉)

梗概 ジャンル／手紙、文体／文語体、出典／一葉全集、刊行／明治 30 年

内容 手紙の書き手は、伯母の家への初めての一人旅が無事であったことを母親に報告している。

「少しも迷うことなく到着することができたので安心してください。」と。伯母様へのお土産も大喜びしてくれた。また、伯母様が一刻も早く親に無事を伝えるべきだからと紙も封筒も用意してくれたという報告。こちらにいる従兄弟が賢いということ、など伯母様の家での様子・出来事なども少し書いている。

選択理由 この作品の大きな特徴として、一人娘が伯母の家に行き、母親に宛てた手紙であることから、主な登場人物が女性ばかりだということ。女子国語讀本の中に取り上げられた理由として、そのようなことがあげられるのではないかと思ったから。また、現在であっても同じような状況におかれることがあり得るが、現在と大きく異なることとして、この作品の時代には電子機器がないため、無事の報告だけであってもわざわざ手紙を送らなければならないのだということ、時代の技術の変化と当時の不便さを感じた。

〔文責 大倉みなみ〕

### 卷七第 1 課「九十の春光」(大町桂月)

この作品は、一～五の部分に分かれており、それぞれで春について語られている。

一、総説 秋の風を泣く、冬の風を怒る、春の風を笑うと表現している。また、風が吹いたときに春が芽吹く様子が美しい日本語を用いて書かれている。春風を「笑う」と表現したように春は万物みな活きる命であり、愛であり、天地が笑うと褒め称えている。また、少女を人生の春とすれば、春は天地の少女であるという比喻も使っている。

二、梅 主に梅について書かれている。雪を冒してまで咲こうとする花は、まるで年老いた女の白粉のように厭うべきものと批判している。

三、櫻花 主に櫻について書かれている。日本を櫻花国と称え、櫻は多いほどよいとしている。また、散るのを惜しむことは櫻を愛することではない、櫻は散るさまを一番愛すべきだと述べている。

四、夕雲雀 菜の花が出てくる。日が西に沈む瞬間の雲雀が書かれている。

五、結尾 春を司る佐保姫、秋を司る立田姫についてで、二柱の対比で文章を進めている。佐保姫は愛くるしい丸顔、ふくよか、春の初風のように温和で温かく、衣は櫻で霞におい花かおる情あつき女性としている。立田姫は、佐保姫と対照的に痩せており、爽快で秋の初風のごとく心地が良く厳粛で、衣は紅葉で霜く月清く、意志強き烈女としている。作者は立田姫を敬し、佐保姫を愛している。ここでも佐保姫、つまり春への愛が読み取れる。

一～五において、春についての様々なことを褒め称え愛している。これは巻七の一番目の文章ということもあり、新学期を迎えたばかりと推察できるので、このような春への愛を綴ったものが配置されたのだろうと思った。先程述べたように、春への愛を美しい言葉で表現しており、読んでいてとても心地が良かった。当時の女学生たちも、この美しい文章に触れ印象に残った人が多かったのではないかと感じた。

〔文責 大西理桜〕

### 卷七第 2 課「高瀬舟」(森鷗外)

この作品は、弟を殺した罪で遠島に送られる喜助と彼を護送する庄兵衛のダイアログである。巻七に書か

れているのは、冒頭のシーンから人を殺した筈の喜助が晴れやかな顔をしている理由が判明する所までである。彼がにこやかな顔をしていたのは彼は「満ち足りていた」からである。喜助はその日稼いだ金を借金返済の為に使い、また別の金を借りるといふ生活を今まではしてきた。そのため、今まで二百文という金を手にしたことが無かった。それが今、罪人への手当として、働きもしていないのに自分の金となった。だから嬉しいのだと庄兵衛に説明する。話を聞いた庄兵衛は自身も状況こそ彼と異なるものの、自身も社会における欲望のループにはまっていることに気づかされる。

ここまでの流れは、読者である私たちに、果たして利益を追い求めることに意味があるのかということを考えさせるきっかけとなる。この作品は読者の今まで生きてきた価値観に一石を投じるものとなっている。洗練された文章で読み手を深く考えさせる、そのような所に私は惹かれた。 [文責 大塚一輝]

### 巻七第 2 課「高瀬舟」(森鷗外)

自分の担当の作品になって、読んでみて、文語文であるが読みやすく物語としても面白かったのでこの作品を選んだ。また、この時代から教科書に載せられ、現在でも広く読まれ知られていることに興味をもった。

この作品のテーマのうちに、「安楽死」がある。兄に迷惑をかけ、自殺を図った弟がうまく死ねず「苦しいからとどめをさしてくれ」と兄に頼む。こうして兄は島流しの刑になったのだが、これは「罪」といえるのだろうか。私は罪ではないと思う。しかし、それを証明するのは難しいことである。それが、私のこの作品に興味をもった理由のひとつである。

その兄である喜助を、舟で運んだ庄兵衛が、喜助の言うこと全て信じていく様子を読んで、私は初めて読んだとき違和感をもった。なぜこの男は、初めて出会った、仮にも「人殺し」の人物を信じることができるのであろうか、と。作品について調べていて、『「高瀬舟」の真相—小説史上、最も読者を欺いた殺人犯—柳澤浩哉』というページを見つけた。ここには、喜助の弟殺しの現場の語りについて、いくつも物理的におかしい点が指摘されている。つまり、著者は喜助が嘘の話をしていたというのだ。それは、この作品のテーマである「安楽死」が根本から覆されることになる。このような点から興味を持ち「高瀬舟」を選んだ。

[文責 田中涼夏]

### 巻七第 20 課 車麩

私が「車麩」を選んだのには二つ理由がある。

まず、関東大震災の直後の様子がとてもリアルに描かれていたからだ。今からもう 90 年以上も前の出来事であるから、歴史の授業で習う程度にしか捉えたことはなかった。しかし、この教科書を使っていた女学生らにとっては、とても身近な出来事だ。関東大震災によって焼け野原となってしまった東京の町を当時の女学生らはどう感じていたのだろうと思った。

次に、当時の震災による食糧不足の様子が分かりやすかった。いつもはお弁当に入っていたら「ぶつとふくられて、がっかりして、そしてベソを掻いた」車麩だったが、それさえも売り切れて、食べ物が本当に不足していたのだと分かる。

また、この話の、鼠が部屋にいるのではないかと、なる場面で、「がさり…」という言葉を繰り返して書かれている部分に臨場感があり印象に残っている。まるで自分の側で鼠が動いているようだと感じた。そして、このような技法を学ぶという点でこの教材が使われていたのではないかと思った。

大正ではなく、平成を生きている私がこの「車麩」を読んで感じたことは、「関東大震災のリアル」だ。あまりにも昔すぎて、物語の中での出来事のように思っていたが、この話から実際に起きたことだと感じられた。 [文責 吉田光希]

### 巻八第 2 課「太陽の言葉」(島崎藤村)

目次に知っている作者の名前があり読んでみたら印象に残ったのでこの作品を選びました。

この作品は小説のような、随筆のような不思議な文章で、書いてあることも結構よくわからない不思議な感じでしたが、それが逆にとても印象的でした。初めは「お早う。」というカギカッコから始まります。そこから一人称語りで主人公の回想が展開されていきます。以下、便宜上主人公のことを「彼」としますが、彼の記憶によると、「始めて太陽の美しさが目に映ったのは日没の時」だったそうです。この時点で割と意味不明ですが、ここから先さらによく分からなくなっていく。彼は青年時代、太陽の笑顔を仰ぐということも無しに多くの暗い月日をすごした後、二十五歳で仙台への旅へ出た際に「自分の内部にも太陽が登って来る時の有るのを知った」らしいのです。そこから三十年余り夜明けを待ち続けたようです。太陽を求める心すら時には薄らいだことがあっても、一度自分の内部にも太陽の登ってくる時のあることを知ってしまった彼は、幾度となく夜明けを待ちうける心に帰って行ったとあります。

もう全く意味がわかりませんが、彼は自分の中での何らかの感情を太陽に例えているのではないかと思います。ただ現実の太陽と彼の中の太陽を区別する文が無いからまざってしまったのではないかと。正直あまりよくわかっていませんが、この不思議さに何となく心惹かれます。何度も読み返してしまいそうになる、謎な、ミステリアスな感じが印象に残りました。 [文責 吉澤舞]

### 卷八第 11 課「月の天橋」(徳富健次郎)

この作品は徳富健次郎(徳富蘆花)によって書かれました。

作者は夜、川を渡って天橋立を散歩してまた、渡守の待つ川辺に帰ります。一文に纏めてしまうと味気ない話に思えますがそんなことはありません。川や川の底を銀河に見立てるなど(天橋立にいるからかも?) 比喩表現が効果的に使われていて、とても面白く感じました。

またこの話の中には色彩表現と、光と影の描写がたくさん出てきます。例えば、「白々」「墨染」「日光」「松風」…。そこに、先に挙げた比喩表現や擬音語が組み合わさって、まるで自分の足で天橋立を散歩しているような錯覚に陥りそうになります。

出典は「死の蔭に」という紀行文です。残念ながら、発行年や全体の内容などの詳しい内容は分からなかったのですが、なんとなく彼の傷心旅行の記録なのかなあと思いました。

[文責 増井天音]

### 卷八第 15 課「國許なる姉に」(下田歌子)

家を出て女学校に通っている女生徒が國許の姉に向けて送った手紙。自分は健康でうまくやっているから心配いらぬという内容や、家族への感謝などが書かれている。この文章は、手紙を書いているのが女学校の生徒で自分たちの年齢と同じくらいだということ、また“もうすぐ卒業”などの言葉でより身近に感じるため、17 歳くらいの女生徒にとって印象的な作品だったのではないかと思います。また、文章が手紙の文そのままであることと、比較的短い文章なので読みやすかったのではないかと感じた。ただ、言葉遣いが堅固しく読みにくい所もあった。そこには手書きで横に意味が書かれていた。書き込みがあったことからこの文章が授業で扱われていたということもわかる。

[文責 山田史佳]

### 卷八第 19 課「ウォシントンの母」

私が選んだ作品は、巻八の十九話目に入っている『ウォシントンの母』である。出展は「欧米名士の家庭」で、作者は載っていない。文体は古文で、漢文の書き下し文だと思われる。選んだ理由は、外国系の読み物について調べたときに読んでとても気に入ったからだ。

話の流れを説明する。18 世紀、北米合衆国の建設者ジョージ・ウォシントンが亡くなった。その後一年足らずでその母も 87 歳の高齢で亡くなり、記念碑が建てられた。その碑の定礎式でのアンドリュー・ジャクソン大統領の演説が記録されている。演説の内容は、ジョージ・ウォシントンの偉大な品格を助成した要素として、母の存在があるというものである。彼は素晴らしい人であるが、母の注意と指導がなければ、自分の地位や利益に固執してしまい、道徳や愛国心を持てなかつただろうとしている。記念碑は現在(当時)まで 80 年間、幾多の女性に向けて無言のメッセージを送っている。

この作品が載せられたのは、日本の女学生にもこのような女性を目指して欲しいという思いからであろう。生徒たちも、賢母に憧れて自分の将来を思い浮かべて授業を受けてきたのではないかと想像した。また、行ったことのない欧米という地についても考えていたかもしれない。自分が当時の学生ならこのような作品を読みたいと思った。

[文責 増谷幸香]

### 卷十第 2 課「月雪花」(芳賀矢一)

この作品はタイトルのおお、月・雪・花についての魅力を書いたものである。私がこの作品を選んだのは文章の描写が美しく、また、当時から月と雪と花が特別なものとされていたことに納得したからである。まず、月というのは太陽と比べきつい光ではなく、温和であり、文中にもあるとおりに眺めて親しみやすいものである。

また、ぼんやりと照らすため清冷な光である。私は昔から月を眺めるのが好きで、心が穏やかになるのだ。だから、つきについて書かれているこの部分は共感できた。「この冷たい光がどれ程の温かみを人間に興へたか」という部分は、人間の月との古今来のつながりを表していて、特に共感できた。

そして、次に雪について書かれている。雪というのは天からの美しい贈り物である。雪の純白は、地上の花とは比べ物にならないほど美しく、それが照らされるとさらに銀色に見えるほどだ。文中では「雪は月よりも一層冷たい」と書かれているが、この「冷たい」は、日が清冷な光であるのに対し、雪が温度的に一層冷たいものであるということに掛けている。これは面白いと思った。

花については、春になり雪が解けて一層価値が高くなるとされている。また、季節が変わるにつれて、色や状態が変わり、香りとしても楽しめる。

やはり、花というのは人生に彩を添えるものなのだと思う。むしろ、なくてはならないのだ。墓前に花を供養するほどだからだ。このようなことは昔も今も変わらないのだと改めて感じた。

月と雪と花というのは、季節によって形や色を変え、その組み合わせによって私たちを楽しませてくれている。この三つの関わりを知っている日本人は本当にラッキーだと思った。この自然が作り出す芸術は、今も昔も共通のものだった。

[文責 井上佳穂]

## 卷十第 15 課「風の音」

「風の音」では、風の音が最も耳に響く音だとされている。禽の声は朗らかであるが、その中でも和やかさがあり、虫の音は清いが寂しい感じがして趣深い。しかし、それらはあらゆる趣を兼ね備えた風の音には及ばない。

新年の初めの風は、ひそやかに音を出している。岩に吹く冬の風は暴れているようでもあるがなんとなく温かみがある。庭の前の葉の梢に吹く風は、颯々として勇ましく聞こえ、心が潔くなる。葉は水を含んでいて柔らかいので、木の声のように聞こえるが、よく聞けば水の声があるように聞こえる。秋風の音については多くの人が言っているが、疎林に星の夜を騒ぎ、荒野に薄墨の夕を吹くのは、どれも感慨深く悲しい。葛の葉がざわざわと鳴る初秋や、高天雲が飛んで肅々と岸に折れふそうとする晩秋は、皆人の心を動かし惹きつける。冬の風は恐ろしい。太い木も、細い木も、枝の水は乏しくなって堅くなり、更に屈することなく風は鋭い音をたてて歌っているようである。趣深いのはこれらだけでなく、それぞれ味がある。

私は普段風の音を意識して聞くことがなく、このように風が歌っているように聞こえたり寂しく聞こえたりすることがなかったので、同じ風でも季節等によって違って聞こえるのが面白いと思った。

〔文責 島崎未海〕

### 7. 結びにかえて—「平成 17 歳男女による作品解題」の解題

大正時代の少女達が使用していた『女子國語讀本』。平成に生きる私達が印象に残る作品にはどのような傾向があるのだろうか。大きく分けて二つの要素が見られた。一つには強い感受性で自然を描いたものである。身の回りに存在する様々な現象を独自の視点で考察した作品は、読者の共感を誘いやすく、当たり前なものに対する新たな発見は心に強くインプットされるのであろう。二つ目として、伝わりやすいメッセージがあるものである。読み進める中で明確な主題を認識することで、作品の全体像を捉えることができ、心に刻まれることに繋がるのだろう。印象に残った作品として男女複数人が選択した森鷗外の「高瀬舟」は明確なメッセージがあり、読者の心に残るため、時代、年齢、男女問わずに読まれているのだろう。『女子國語讀本』は良妻賢母を育成するための教材として考えられがちだが、「高瀬舟」に代表されるように性別に縛られず万人を対象にした作品も収録されている。〔文責 大塚〕

#### 引用参考文献

稲垣恭子（2007）「女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化」中公新書井

上敏夫編（1981）『国語教育史資料卷二教科書史』東京法令

内田静枝編（2014）「女學生手帖：大正・昭和 乙女らいふ」河出書房新社

片山清一（1984）「近代日本の女子教育」建帛社

唐沢富太郎（1979）「女子学生の歴史」木耳社

田坂文徳（1969）『明治時代の国語科教育』東洋館出版社

高山美佐（2017）「高等女学校講読用教科書における言語教材：『女子國語讀本』（吉田彌平ら編）初版～六訂版の検討」国語教育史学会「国語教育史研究」（17），39-47，2017

ノーベル書房編集部編（1987）「思い出の高等女学校 記録写真集」ノーベル書房

野村剛史（2013）『日本語スタンダードの歴史—ミヤコ言葉から言文一致まで』岩波書店

眞有澄香（2005）『「讀本」の研究—近代日本の女子教育』、おうふう

三浦勝也（2007）「普通文と時文」『東京都立産業技術高等専門学校研究紀要』1号，28-34.

山口仲美（2006）『日本語の歴史』岩波書店

山本正秀（1965）『近代文体発生の史的的研究』岩波書店

大和和紀（1995）「はいからさんが通る全4巻」講談社漫画文庫

DVD ワーナー・ブラザース・ホームエンターテイメント（2016）「はいからさんが通る」